

史料室だより No. 36

東洋英和女学院史料室委員会
発行 1991年9月24日

特集：かえて幼稚園

かえて幼稚園創設まで

黒田成子

東洋英和女学院創立90周年の前年1973年に記念事業の一つとして新しい幼稚園が発足した。それがかえて幼稚園である。当時の石井次郎院長は、「この新設幼稚園は、一つには、70年の歴史をもつ学院幼児教育の成果を幼児そのものために献げることであり、いま一つは、幼児教育の研究と教師養成とに役立てるためである」と短大保育部会の「はぐくみ」第7号(1973.5.3)に述べている。以下かえて幼稚園の設立に至るまでのことをなるべく資料に基づき記してみたいと思う。

東洋英和の短期大学では保育者養成には欠くことのできない教育実習をする付属園を持っていなかった。そのため都内や近県の各園に教育実習を依頼していた。特に東洋英和幼稚園には長年にわたり協力と支援を頂いてきた。各園を煩わせることなく、短大独自の方針で学生の教育実習が行なえる場をとの願いはM.F.スクルトン教授(1958年まで本学院に在任)も常に言い続けていた。

1965年に長野彌元院長から、東洋英和女学院の教育に感服された小滝頭忠氏の尽力を得たので土地購入を考えている、これを新しい幼稚園の建設用地にしてはどうかという話があった。場所は横浜市の現在の緑区美しが丘である。(当時は元石川と称した。)

早速同年の秋に長野元院長と短大代表の2名で再三現地に出かけた。当時はまだ荒涼とした荒野や丘陵の並ぶ地で、25年後の現在の活気ある「たまぶらーざ」など想像もできなかった。

この報告を受けた保育科会では遠隔の地であることに難を示し、又幼児を研究実験の対象にすることに反対する声もあり、設立に関しては意見が分かれた。しかし協議を重ねた結果、東急田園都市線の沿線であり、いづれ便利になること、又研究といっても幼児の人格を無視するようなものではなく、むしろ短大の目指す新しい幼児教育の理論をどのように実施して子どもたちの成長に役立てられるかを検討する研究であることが理解された。10月4日と6日の保育科会記録によるとこの件に関し科会として積極的姿勢をうち出すこととなり、ようやく付属幼稚園につき構想の案を作成し、教授会に提出された。

1967(昭和42)年10月9日学院と東京急行電鉄株式会社間で2,310平方メートル(約700坪)の土地売買契約が締結された。短期大学教授会では付属幼稚園に関しいくつかの取り決めをした。内容の一部は次の通りである。園名は東洋英和女学院短期大学付属



(初期の頃の幼稚園)

かえで幼稚園とする。短大付属であるが内容について保育科が主体性をもつ。園長は学長が兼任し、主事は短大から出向し、主任と連携を密にする。子ども中心の保育をする。地域に適合した保育を旨とする。カリキュラムの固定化をせず、いろいろの方法を試みる。かえで幼稚園園児は卒業後東洋英和女学院小学部へ試験なしでは入学できない。

その頃は丁度短大校舎増築の時に当たり、多事多難の学院にとり新幼稚園建設までは仲々実現がむずかしく、一時中断の形となった。

1971年に設立準備委員会ができ、学院内各部を調整することに時間がかかり、ようやく1972年2月に理事会で承認された。建築および工事に関しては初代主事の飯田泰造教授執筆の「史料室だより」(1979.11.6)を参照されたい。

園舎設計は伝建築事務所の澁谷栄一氏に依頼した。内部の施設には年令相応の配慮がなされ、保育室のアーコーディオンカーテンはオープン保育に最適である。家具をユニット式にし、子どもたちが自主的に環境構成できるように配慮された。

1973(昭和48)年4月5日始めての入園式に135名の日やけした農家の子どもや、青白い顔色の団地っ子たちが集まった。504名の応募者から抽せ

んで入園が決定。徒歩で通園できる地域の子どもたちである。土橋克子主任が「この幼稚園の名前は……」と言いかけると一斉に「かえで！」と大きな歓声もどってきた。初代園長の石井次郎先生が挨拶に立ち「神様は皆さんの……」と始められると「ハイ！」と嬉しいどよめきがおこった。この時子どもたちの幸せを心から祈った。

第1回の実習生となった保育科2年生の市川おるさんの手記を紹介したい。

「……かえで幼稚園の園児たちは私の今まで抱いていた“キリスト教主義幼稚園児”に対するイメージを破ってくれました。大切なことは一種独得のふんいきの中で育てられた『小さな紳士淑女たち』である必要はなく」むしろふつうの子どものらしい子どもであって当然であることがわかったと記している。(「短大だより」昭和50年1月号)

保育は子どもに何かを教えこむことではなく「子どもが本当に生き生きと生きるためにどう関わったらよいかを保育者は常に問われていること」を学んだとも記している。終りに1人1人の学生や子どもに神と人の愛を伝える「かえで」の使命を思い、多くの方々の変らないご支援を願うものである。(元短大保育科長・元かえで幼稚園長)

かえで幼稚園のこと(その一)

土橋克子

〈何もかもが新しく〉

先日、黒田成子元園長から一冊のアルバムが届いた。表に本園創設に当たられた伝建築事務所とあり、かえで幼稚園の全景が収められていた。

私はその写真を眺めるうちに、何もかもが新しく、まだペンキの香が残る明るい部屋のまん中でこれから始まる子どもたちとの生活に喜びと不安の入り混った、わくわくするような気持を覚えたあの頃を思い出したのだ。昭和48年3月というのに春の訪れがおそかったのかその広い部屋に工事

の方たちが使用していた石油ストーブを拝借し、飯田泰造元主事、進藤、福田、大森、杉山そして私の六名が暖をとりながら入園式のこと、担任のことなど具体的な相談をはじめていったのである。その翌年、当時院長を辞された長野彌先生が園庭に二本のぶどうを植えてくださり、その一本が今も秋になると沢山の房をつけてくれている。

「わたしはぶどうの木……」のみことばを覚え育っていった卒園児は一千名を越え、そのぶどうは20の年輪を数えようとしている。くずの葉の茂る



(卒園式 石井次郎先生・飯田泰造先生)

斜面で草むしりをされていた長野先生を穴熊とまちがえそうになったことなどなつかしい思い出。
〈付属園として〉

石井次郎学長は初代園長として次の事柄を付属園に期待された。第一は、東洋英和女学院に連なる枝としてキリスト教保育を行うことであった。具体的には、ご自身の幼児体験から、子どもたちに旧約聖書の物語をくり返し聞かせるように。

先生は時折子どもたちに、サムエルの話をなざり神に向かって「はい」と約束ができる子どもは、やがて自分で責任がとれる大人に成長するのだと言われた。また一日の保育の中に、必ず静かに祈る時をおくこと、一方では、障害をもった子どもに対しては出来る限り積極的に受け入れることを求められた。それはキリスト者として当然の姿勢であり、英和で掲げてきた「敬神奉仕」の理念であると明示された。第二は、地域の子どものための幸わせのためにあるのだということ。第三は、付属園であるからには、明日の保育に向けて研究的に保育を実践する責任があると言われたのである。

私どもはこれらのことを心にとめて、何度も討議をし、試行錯誤を重ねていった。昭和52年保育学会で丸山、宇賀神先生組が初めて発表、倉橋賞

を受けた時、五年目にしてやっと保育レポート1号をまとめた時、既に学院を辞されていた石井先生は「とうとうやりましたなあ」と大変喜んでくださり、その後いつも私どもを励ましてくださった。そのことを覚えて私どもは、現在もお、毎日の保育を自分のことばで書きあらわし、検証する努力を続けている。その後、黒田成子元保育科長が園長を兼務され、黒田先生の指導のもとに聖書研究をし保育者としての信仰をやしなうことができた。

〈実践の場で〉

当時、飯田主事は毎木曜日には園に出向され、私どもの遊びに対する考え方をまとめながら、ともかく保育を始めていった。その頃の園庭の広い空間が子どもが大勢いるにもかかわらず使用されず、ブランコや滑り台などに行列ができ、砂場は足下の砂が見えないほどに子どもであふれていた。この現実子ども同士の間横の関係がうすく、仲間との遊びが育っていないことを物語っていた。飯田主事はこうした子どもの姿にいち早く気づき子どもたちが先ず、自分の遊びを持てるようにと砂場を拡張し、丸太に釘を打ち込むことから木工を導入した(保育レポート1号)。それは単なる技術修得のためのものではなく、多少抵抗感のある板に取り組むことによって、子ども自身に満足と自信を与えることになっていった(34回学会論文)。園庭には、創ることの楽しさとすばらしさを知った五才児と父親たちの土曜ワークの活動で改修された何代目かになる手づくりの遊具が置かれている。多くの先生方、ともに仕事に励んだ仲間深く感謝したい。(かえで幼稚園副園長)

かえで幼稚園のこと(その二)

森 高 ホサナ

私は昭和48年3月に保育科を卒業し、創設されたかえで幼稚園に就職しました。ちょうどオイルショックの時に建築された事になりますので、資

材不足で開園に到るまでには、苦労もおおかったと聞いています。主事として短大から、飯田泰造先生、現場は東洋英和幼稚園から土橋克子先生を

迎え、経験者二人と私を含む新卒二人を抱えた保育者集団でスタートしました。

今から19年前のたまプラーザは、赤茶色の土とひょろひょろの街路樹、そして団地が目飛び込んで来る町でした。都会から移って来た先生には不向きわまりない町に感じられたようでした。タクシーはなくバスも30分に一本しか走っておらず、教材や生活用品を買いに駅前にあるお店にひたすら歩いて出かけました。今でもバケツやホウキを抱えて団地の中を、歩いている姿を思い出してニヤリとしてしまいます。

一方、まわりには自然がいっぱい残っていました。遠足に行ける所が近くにありそうだと、保育を終えて近くの野山へ出かける日もありました。春にはすみれの花の群生している丘や、山道に黄水仙の咲き誇っているのを見つけ、心を踊らせました。私は、こんな素敵なお所に遠足の時だけ行くのはもったいないと考え、ゴザをしょって子ども達とたびたび散歩に出かけました。芝生の山では草ぞりをし、野山を駆け巡り、お弁当を食べて、子ども達と一緒に満足して帰って来たものです。「ただいま！」の声に、急いで出てきて「おかえりなさい」と言って下さる先生の顔に安堵の色が伺えました。

その頃の私は、若き故子どもを預かる責任よりも何でもやってみたい気持ちが先行していたのです。この事はほんの一例ですが、今までの事を振り返ってみてもいつも冒険する事が最大限に許されていたと思われれます。かえて幼稚園の創り出す保育、新しい事に挑む保育の土台はこのような環境の中で育てられて来たのです。

創立二年目までは、子どもが一晩だけ幼稚園に泊まる保育を試みました。しかし私たちは子どもたちをもっと自然の中で過ごさせたいとの願いを持ち、三年目から年長組の子ども達をつれて箱根に二泊三日のキャンプに出かけるようになりまし

た。卒園した子ども達が青年になり、毎年キャンプの手伝いにやって来てくれるのは、本当に嬉しいことです。

〔 福島さんのこと 〕

かえて幼稚園が、たまプラーザの町にしっかりと根づくまでの12年間、福島さんが娘さんと一緒に幼稚園の二階に住み込んで下さいました。花や木、そして動物を愛した福島さんから、私たち保育者は“育てることの喜びとやさしさ”を教えられました。（かえて幼稚園教諭）

キャンプの手伝いをして

茂木俊明

私が17か18の頃、再び幼稚園を訪ねてみた。お弁当を途中で買って心はまるであの頃とは少しも変わらなかった。すべり台、ブランコ、砂場、かえてお得意の木の塔、教室、廊下、七番目のヤギが隠れられそうだった振り子時計、どれもこれも全体に $\frac{1}{8}$ 程小さくなってしまった様だった。あのいつも門の前にいた「クロ」も小さくなった様な気がした。しかし、木の幹とグラウンドではしゃぐ声は大きくなっていった。なつかしい木の床、木のサッシ、ノコギリを挽く音、木屑の匂い、ここで大工仕事をし、あそこで絵を描いた。ある時、大学の授業でロールシャッハテストという大層なことを教わった。なんでも絵を見るだけでクライアントの心理状態が解かるそうだが、ご丁寧に教科書の角に挿絵が入っていて、「なんだこんなもの幼稚園でよくやったよ」と思った。この様なことはいろいろあった。子供達はキャンプの名札を作っていたが、電動糸ノコでスイスイ器用に切っているのを見て驚いた。忘れていたが私達も使っていたということを聞いてさらに驚いた。いろいろなことを経験し、「自分で作る」喜びは今でも何でも手を出し、一度自分でやってみなければすまないという好奇心とどんなに小さなチャンスも



(5才児と父親たちの土曜ワーク)

のがさないといい気性は良きにつけ悪きにつけ今の自分を決定し続けている。ここで培われた好奇心と経験には非常に感謝している。様々なことを知り、このことを飽きもせず聞いてくれ科学の素晴らしさを知れたことに喜びを禁じ得ない。

あの子どもも自由でしかも原っぱを駆け回る時の様なキラキラした瞳が社会に出て行っても曇らない様にとお祈りせずにはいられない。

教育学専攻ならいざ知らず、化学の学生である私が五年も続けてキャンプに行くなんて奇想天外なことだ。先程小さくなったと思ったクロが二代目クロミに代替りしていた。縮んでしまったわけではなかったのだ。安心した。(1974年度卒)

保育を志して

浦上真理子

『お祈りはね、毎日するんだよ。いつもイエス様が見てくださるから。』この幼児讚美歌と共に、懐かしい幼稚園の頃の記憶が蘇ってきます。礼拝とお弁当以外の時間はすべて自由保育。自分のやりたいことをやって過ごしていました。砂場で大きな山を作ってトンネルを掘ったり、木工室に行っては、普段家では触ることのできない鋸や金槌で、木を切ったり釘を打ったり、ある友達はお土のおだんごを作ってすべり台の上から転がし、どうやったら早くこわれないで下までいくかと長

い間かけて研究(?)していたと聞きました。

空き箱を作ったの創作。各家庭にあるおかしな箱や牛乳パック、乳酸飲料やヨーグルトのプラスチックの容器、トイレットペーパーの芯、あらゆる物を持ち寄って、それぞれの個性豊かな宝物を作りました。

先生方に言われてするのではなく、自分達で考え作り出していく遊び。このことが小学校に入学して後もずっと心の底に残っていたように思います。家から幼稚園まで、大人の足で10分程の道のりを初めは母親と手をつなぎながら、だんだんと友達と通っていく中、春にはつくしやたんぽぽ、秋には紅葉した落ち葉を拾っては先生のおみやげに持っていくのも楽しみの1つでした。

現在、保育科で幼児の教育について学んでいます。2年間こちらで教育を受けた先生方が、子供の主体性を重んじ、同じ目線で共に物を見つめ、見守って下さった幼稚園の姿勢に改めて感謝し、幼児期をかえて幼稚園で過ごせたことを本当に幸せに思っています。

“幼稚園の先生になりたい”これは幼児期からの私の夢でした。その夢にこの幼稚園時代を思い出しながら一歩ずつ近づく為に、大切な幼児期の教育という重みをしっかりと意識し、努力を重ねていきたいと思っています。(1978年度卒)

「かえで」の子がいるから大丈夫

篠山 淳子

1977年から1984年までの7年間に、我が家の3人の子供達、明日香、大明、美咲は、それぞれの人生で最も大切と思われる幼児期を、かえで幼稚園で過ごし、美咲の卒園まであと一年というとき、父親の転勤のため渡米しました。

英語が全くわからず、間違ったバスに乗って怖い思いをしたり、教室や校庭でポツンとひとりぼっちで悲しかったことなど、たくさん困った事が

ありました。でも、一人一人の子をそのまま受け入れ、他の子と比べること無く待っていてくれたかえでで育った子供達は、アメリカの先生も、待っていて下さると信頼することができ、焦らず、安心して、着実に力をつけていきました。

その頃、日本人の間では、『いじめ』についてよく話され、帰国した子のいじめられた例を、幾つも聞かされました。「日本に帰るの心配じゃない？」と子供達に聞くと、3人揃って「たまプラーザには、かえでの子がいるから大丈夫」と自信に満ちた顔で答えたのが忘れられません。

4年の滞在の後、帰国。下の2人は地元の公立学校に転入しました。最初の登校日に迎えに来てくれた文ちゃんも、廊下で声を掛けてくれたまりちゃんも、かえでの友達でした。また、かえでの父母で始まり、地元で育っているコーラスの仲間も、私たちの帰国を待っていてくれました。

あれから3年たち、この春、子供達は東京大学、学芸大附属高校、美しが丘中学校へ入学しました。それぞれ、制服姿を見ていただきたくて、或いは、おめでとうと声をかけてもらいたくて、かえで幼稚園を訪ねました。本当に自分が受け入れられていると信じている。大好きな先生方の前での彼等の顔は、伸びやかで明るく、美しく見えました。その表情の中に、彼等の人生に対する信頼と、神に愛されているという信仰の芽が、この幼稚園で育てられたことを思い、改めて、かえで幼稚園に通うことの出来た子供達の幸せを感謝しました。
(卒園児母)

かえで幼稚園の思い出

中川 和子

娘と息子が最も大切な幼児期の3年間をかえで幼稚園で過ごせたのは、全く神様の御恵みと御導きによるものと、心から感謝しております。

優しい先生方に見守られ、のびのびと幼稚園生

活を送った娘は、自分で遊びを見つけられる明るい子に育っていると思います。

障害を持つ息子は、娘とは比べものにならない程お世話をおかけしたわけですが、それだけ幼稚園との結びつきも強かったと言えるでしょう。入園したばかりの頃、「軽度の自閉的傾向を伴う発達障害」との診断を受け、担任の森高先生に御相談したところ、快く保育を引き受けて下さり、以来3年間、異例の担任持ち上がりでおつきあい下さいました。専門医のアドバイス等にも気を配って下さり、本当にきめ細かい保育をして頂きました。母親の言うことを聞かなくなって来た時期でもあり、幼稚園で育てて頂いたというのが実感です。余りお手数をかけるので申し訳なく思っております。主任の土橋先生が「キリスト教の幼稚園としてお受けするのは当然のことですから」とおっしゃいました。それを聞いて、私もキリスト者なのですが、雷に打たれたような気が致しました。これがかえで幼稚園、ひいては東洋英和の神髄なのだ、と改めて感じ入った次第です。

その精神故か、どの先生方も息子をお心にかけて下さり、見かければ声をかけて下さるという風でしたので、それが自然と子ども達にも伝わったのでしょう。どの子も息子を受け入れてくれ、必要な時にはさりげなく助けてくれていたようです。また、私も遠足やキャンプ等に参加させて頂き、先生方や子ども達とお話できたことは感謝です。

今年の3月、数々の思い出を胸に、5年間お世話になった幼稚園を去りましたが、娘も息子も、これからも明るく成長していくことでしょう。

(卒園児母)

【編集後記】 「何事にも時があり」とは、旧約『コヘレトの言葉』です。書くにも時がある、と言えましょう。今、書いておかないと忘却のかなたに消えてしまうこともあります。執筆者にお礼を申し上げます。
(原島 正)